「凛は、もっと真姫ちゃんと仲良くなりたいにゃ！」
「……って後ろから突然抱きつくの止めなさいって言ってるでしょ！」
「だって、前から抱きつこうとすると真姫ちゃん逃げちゃうし」
「そういう問題じゃなくて！」
「そうだよ凛ちゃん、抱きつくなら事前にちゃんと言ってからの方がいいよ？　びっくりしちゃうし」
「じゃあ、真姫ちゃん、今から抱きつくね！」
「え、ちょ、待ちなさ」
「にゃー！」
「わ、こら、危ないでしょ凛！」
「ちゃんと最初に断ったよ？」
「だから、言えば良いってものじゃなくて！」
「むー、真姫ちゃん色々難しいよぉ」
「凛がシンプルすぎるんでしょ！」
「ま、まあまあ二人とも」
「かよちーん！」
「きゃあっ！　り、凛ちゃん、びっくりするってば」
「ほら真姫ちゃん、かよちんは抱きついても怒らないんだよ？」
「なら、ずっと花陽に抱きついてればいいでしょ」
「それはそうなんだけど、凛はもっと真姫ちゃんとも仲良くなりたいのにゃ！」
「あ、凛ちゃん最初に戻ったね」
「もう……突然なんなのよ。花陽、説明して」
「え、あ、あのね、今日凛ちゃんと話してたんだけど、あんまり真姫ちゃんと遊びに行ったこと無かったなあ、って」
「……それは、まあ」
「だからね、凛は真姫ちゃんと仲良く」
「はいはい、つまり遊びに行きたいわけね」
「そうとも言うかも！」
「他にどう言うのよ」
「凛は真姫ちゃんと……」
「それはわかったから」
「じゃあ、さっそく遊びに行こう！」
「行かないわよ」
「にゃ？　なにか用事とかあるの？」
「と、特にはないけど」
「じゃあ遊びに行こう！」
「行かないってば！」
「なんで？」
「なんでって、その、い、行く理由が無いっていうか」
「遊びに行くのに理由なんていらないよ！」
「そ、それはそうかもだけど」
「じゃあ行こう！　かよちんも行きたいって言ってるし！」

「う、うん、私も、出来ればもっと真姫ちゃんと仲良くなりたい、かな」
「ほらほら！」
「ちょっと凛、手を引っ張らないでってば！」
「ど、どうかな、真姫ちゃん……」
「もう……わかったわよ」
「やったにゃー！」
「わ……良かった」
「で、どこに行くの？」
「にゃ？」
「遊びに行くのはいいとして、どこに行くのよ」
「えーっと、どこ行こうか、かよちん」
「ええっ!?　わ、私はどこでも」
「決めてないのね」
「凛は、真姫ちゃんともっと仲良くなれたらそれでいいにゃ！」
「ちょっと凛、そんな大きな声で言わないでよ……もう」
「ん？　どうしたの真姫ちゃん？」
「どうしたの、じゃないわよ。恥ずかしいじゃない」
「恥ずかしいってなにが？」
「だから、その、仲良くなりたい……とか」
「恥ずかしいことなんてないにゃ！　だって、凛は真姫ちゃんと」
「わかった！　わかったから！」
「真姫ちゃん、顔が赤いよ？」
「赤くもなるわよ、もう」
「真姫ちゃんは照れ屋さん……なのかな？」
「はいはい、それでどこに行くの？　カラオケ？　それともゲームセンターとか？」
「うっ……い、行きたいんだけど……」
「どうしたのよ」
「その、今はおこづかいがピンチなのにゃ」
「ああ、そういうこと」
「面目ないにゃ……」
「じゃあどこかでお茶でもする？」
「どこかって、ファミレスとか？」
「それでもいいけど」
「むううう……」
「……だめっぽいわね」
「ご、ごめんにゃ」
「べつにいいわよ。それじゃ……ウチにでも、くる？」
「え？　真姫ちゃん家？」
「とりあえず、お茶くらいは出すわよ」
「えええええ！　本当に？　本当に真姫ちゃん家に遊びに行っていいの!?」
「な、なによ凛、ウチにくるのがそんなに心配？」